HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	大正期の北海道帝国大学とキリスト教
Author(s)	松沢, 弘陽
Citation	北大百年史, 通説, 762-776
Issue Date	1982-07-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/30036
Type	departmental bulletin paper
File Information	tsusetu_p762-776.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

大正期の北海道帝国大学とキリスト教

――長崎次郎・林文雄・近藤治義を中心に――

松沢弘陽

明治末年、一九一〇年代初めに、東北帝国大学農科大学から姿を消した社会問題や社会思想への関心は、一九二一年（大正一〇）前後、一九二〇年代に入るころ、新しい形と力をもって復活するに至った。これを北海道帝国大学における大正デモクラシーの時期ということもできよう。この時期にも、学生の大勢に比べれば少数ではあったが、社会の諸分野で重要な働きをなした異色の人々――その異色のゆえに、母校からは忘れられがちな人々――が世に送られた（「札幌農学校と明治社会主義」参照）。ただ、一八九〇年代から一九一〇年代初めにかけての、社会問題や社会思想への関心が未だ混沌たる星雲状態にとどまっており、キリスト教と素朴な社会批判の思想とが未分化のままに結びついていたのに対し、この時期には、社会科学＝マルクス主義とキリスト教とが分化していった。また、札幌農学校の時期以来、札幌基督教会のち札幌独立基督教会の学生に対する影響力が、他の諸教会よりまさっていたのに対し、一九一〇年代に入ると、北辰日本基督教会（一九二〇年札幌日本基督教会、同四一年札幌北一条教会となって今日に至る。以下名称は便宜使いわける）の影響力が次第に強まり、他教会を凌ぐ勢いを示し始める。新渡戸稲造や有島武郎が学生と交わり親しく導いていたころとは変って、学生のある者は思想形成において、学内の教師たちよりも、教会と牧師からはるかに大きな影響を受けるようになっていた。本稿では、そのような人々の中から、札幌北一条教会に属し、農科大学・北海道帝国大学在学中から卒業後を通じて終生親しい交わりを続け、それぞれの世界ですぐれた働きをした三人をあげたい。

北一条教会は、一八九五年（明治二八）、日本基督教会に属する

札幌日本基督教会として創立された。札幌農学校一一期(一八九三年卒業)生の小川二郎がその中心メンバーの一人であり、農芸伝習科五期(一八九三年)卒業生の本郷敏慎や農学校生佐々茂雄・萱場三郎・芳賀鍬五郎らが初期の教会建設に力を尽した。小川や本郷が札幌基督教会(現札幌独立基督教会)会員の人々とともに北海禁酒会に加わっていたことは、本書所収「札幌農学校と明治社会主義」でふれた。札幌日本基督教会の農学校学生に対する影響力は、一八九九年(明治三二)森林科開設とともに赴任して教授となり、終生長老や日曜学校長として教会に奉仕した新島善直が、森林科―林学科の教授として、また文武会や遠友夜学校の役員として学生を導くなかで徐々に広がっていった。しかし、それを決定的なものとしたのは、一九一三年(大正二)、牧師として迎えられ、一九一八年(大正七)まで牧会・伝道に力を注いだ高倉徳太郎であった。彼自身東京帝国大学法科大学に学びながら、植村正久の強い影響のもとで、約束された官途を捨て神学と牧会の道に転進した人であり、学生・知識人への伝道と指導にすぐれた力を発揮した。続いて高倉の後をうけた小野村林蔵も、一九五三年(昭和二八)までの長い牧師在職中、学生や生徒の訓練に心を注いで、その中から伝道者を輩出した。本稿でとりあげる、長崎次郎・林文雄・近藤治義の三人は、高倉・小野村両牧師の時代に、東北帝国大学農科大学・北海道帝国大学に学びつつ、この教会に連なって、生涯の進路を大きく変えられるにいたった人々である。

一

長崎次郎(一八九五―一九五四年)が、一九三四年(昭和九)、私産を抛ち身命を賭してキリスト教出版に献身することを決意したおり記した、「基督教出版への召命記」と題する文章(『葡萄の枝』第一巻第一号、一九三四年九月)は、彼にとっての農科大学および職業の意味をはっきりと示している。

「四国の南側……安芸と云ふ小さな町は私の故郷である。……町で唯一軒だけの書店と、小さな教会の牧師館との間に挟まれて私は育った。……子なき牧師夫妻から子供の如く愛せられて、とう〳〵日曜学校に出席する様になった。私が札幌の農学校に学んだのも同じ機縁からであった。私は其処で文学の基礎知識としての自然科学を修める気であった。然し、上なる声に導かれて文学を捨てて教育者たらむことの志が与へられ、作物学を専門とすべき身が雑草に就いての卒業論文を書き、人を耕し、人の世の雑草を抜き去るべく世に出た」。

長崎が札幌の農科大学を選んだのは、この文章に述べられたように、「牧師百島操氏ノ示唆ニヨリ、札幌農学校ノ後デアル

北海道大学ノ農学部ニ入学セント志シ」（最後の病床で口述した「長崎次郎略歴」『福音と世界』一九五四年十一月）たのであった。

一九一四年（大正三）東北帝国大学農科大学予科に入学した長崎は、恵迪寮に入り、開識社に文武会に、文芸における豊かな天分と読書のほどをうかがわせる多彩な活躍をした。入寮早々寮歌選定委員に選ばれ、彼自身の作「穹蒼高く」は大正五年南寮寮歌となった。『文武会々報』には、彼の創作、エッセーや短歌がたびたび載せられたし、彼自身同誌の編集も担当した。予科を卒えるころには、トルストイの飜訳を手がけて、『社会思想普及叢書第三巻　イエスの教へ　附其の真髄』として刊行している（一九一七年十二月、大阪トルストイ研究会刊）。しかし、彼のいわゆる「上なる声」は、このような農科大学進学の本来の意図と、文学への志望とを、大きく転轍することになった。それは、長崎にとって、高倉徳太郎・小野村林蔵両牧師との交わりと、北辰日本基督教会の教会生活の中で与えられた。一九一六年（大正五）、彼は高倉牧師から受洗し、同牧師が札幌を去った後も、彼の住む大学キリスト教青年会の寄宿舎が教会の隣だったこともあって、小野村牧師と極めて親しかったという（山田滋「解説」『小野村林蔵全集第一巻』一九七九年、五三四ページ）。また、高倉や小野村と出合って終生の交わりを結び、大学卒業後の進路を大きく決定されるにいたったのとほぼ時を同じくして、彼が卒業後大きな力を注ぐことになった癩者との交わりも始まった。それは彼自身にとって、終生の大きな出来事であったらしい。

「私の……生まれた町は四国遍路の通路である。私は幼い頃、毎日その四国遍路の中に癩者を見た。その人々は……己が身を棄てる死場所に四国遍路路を選んだと云ってよいと思ふ。……恰度私が小学校を卒業する頃であったらふと思う。私の父が……新聞の記事を読んで聞かして呉れた。……それは新設せられた許りの大島療養所（香川県）の患者が、島の生活のさみしさ、わびしさを訴へて、書物の寄贈をアッピールする為に田舎の新聞に寄書したものであった。私はその時からこの問題に病みついたのである。そして自分で金を儲けられたら、先づ第一に書物を買って療養所へ寄贈したいと考へるようになった。札幌の大学在学中寮歌に応募して生れて初めて自分の力で金を得たので、私はやっと十年近い願ひを果すことが出来た」（「出版漫筆」『葡萄の枝』一九三八年九月）。大正五年南寮々歌「穹蒼高く」は、北大の一予科生を救癩運動につなぐきずなのいとぐちにもなったのである。

こうして札幌農学校の後身に憧がれ、文芸のために自然科学を修めることを志した青年は、「人を耕し、人の世の雑草を抜」

くべく志を転じた。一九二一年（大正一〇）農学部農学科を卒業、卒業論文は「雑草並除用薬剤並びに肥料溶液が雑草種子発芽に及ぼす影響に就て」であり、成績は悪くなかったようである。

農学士が教育を志すにいたった事情について、長崎はこう述べている。「皆がそれぞれ仕官の道を選んで、御役人や何かを志したとき、私はクラーク先生以来かすかに残る宗教的方面に心惹かれて聘せられるがまゝに……ミッションの女学校の教頭になった」（「私は雑草」、戦前『朝日新聞』随筆欄に掲載されたといわれるが、確かめることができないので、秋山憲兄「日本キリスト教出版史夜話(10)――長崎書店とその時代1」『福音と世界』一九六四・五より重引）。しかし、「人の志の雑草を抜き去る」べく教師となった人自身は、その志いれられず、いくつかの女学校中学校に転職失職を繰り返すことになった。自分自身が「雑草的存在たるを免がれなかった」ことに気づき、「依然たる雑草的存在が災して再度野の人にな」（同前）るという歩みを反復した。いつごろからか彼は、「雑草生」をペンネームとするようになった。この間彼は、文学好きの古本漁りから転じて古本を商うようになり、やがて出版を始めた。理想の出版を念じてついに財産を使い尽し、過労が重なって病にたおれた。そのような時に、農科大学在学中からのキリスト教信仰の師高倉徳太郎が急逝したことは、長崎に大きな衝撃を与え、あらためて自からの召命について問い、キリスト出版への献身の志を新たにするよう促がした。

「今の世に真に理想をかかげ、理想を行ふための中学校を経営する丈けでも百万円を要する。私はそれだからはした金で出来る出版を選んだ。私はこれに父より遺された僅かの財と、私の今迄勤めて得た僅のものと、それに労力を献げた。出版をはじめて満十ヶ年、私は少くともその利潤として一銭をも受けたことはない。然し、もう片手間、（一方で生活費をかせぎ乍らやる程度）では行かなくなった。私は来るところ迄来てしまったのである。この四月から私はこれが為めにすべてを献げる決心をした。私は私の一生をこれに賭ける。……最後に一言する。私は出版者は公器であるとの確信の下に立つ、この公器を決して私しない覚悟である」（「基督教出版への召命記」）。帝大の学生として世に出て、女学校の教師となり、古本屋から出版を志すにいたる。この道すじは、長崎より一〇年余り早く東京帝国大学哲学科選科を出た岩波茂雄のそれとよく似ている。事実岩波と長崎の間には心をゆるした深い交わりが生まれた（秋山憲兄「冬の日の回想」『エデイター』一九七九年・三＝四月合併号）。長崎書店は一九四四年（昭和一九）、戦時体制下の出版統合によって新教出版社となり、長崎は初代社長となった。同じく札幌の学園に学んで世に出（一九〇四年林学実科卒）、古本屋、焼き芋屋を始めさまざまな職業を遍歴した後、叢文閣

を起し、大正デモクラシー期の出版文化に大きな足跡を残した足助素一（在学中の足助については、彼の創作と感想、日記、書簡および諸家の追憶を集めた『足助素一集』一九三一年を、彼の出版事業については、瀬沼茂樹「足助素一と叢文閣」〔瀬沼『明治文学研究』一九七四年所収〕を参照）、と並んで、札幌農学校―北海道帝国大学に学んだ出版人の双璧といえよう。

二

林文雄（一八九〇―一九四七年）は、長崎次郎より四年おくれて、一九一八年（大正七）、北海道帝国大学最初の予科生として入学した。父が長く北辰日本基督教会の長老をつとめるクリスチャン・ホームに育った彼は、早くから教会に連なり、北大入学に先んじて、教会生活を通じて長崎と相識っていた。父竹治郎は、札幌一中の図画教師で、「朝の祈り」などで知られる画家だったが、それ以上に、北辰教会―北一条教会の熱心な会員であり、自分の家庭をも一種の家塾として、中学生への伝道のために献げていた。林文雄は、札幌一中在学中から、高倉徳太郎牧師の導く中学生のグループ「友愛会」に加わり、長崎より一年遅く、一九一七年（大正六）中学四年の時、同じ高倉牧師から受洗した。こうして林が北大予科に入ってからの思想形成は、小野村牧師とそのもとに集まった、小川信一（本稿で先にふれた小川二郎の息）、豊福豊、近藤治義（いずれも北大に学ぶ）らとの交わりにより、また父との日々の家庭生活の中で行われていった。

今日残されている彼の日記は、ちょうど一九二二年（大正一一）、彼が第一期生として北海道帝国大学医学部に入った年から始まっている。予科から医学部に進んだ彼は、やがて、創業の意気ごみに燃えて展開される医学の専門教育に衝撃を受け、その中で動揺模索しながら、自分は医学のいかなる領域に召されているのか、探究を始める。医学部の講義が始まって一と月もたたぬ四月二十五日、「本科に来てよりただ細胞とか骨の名前とか薬の名などにてほと〳〵いやになりたり、朝夕つとめて聖書の一節を読む、予科の時は語学などありて少しは心の柔ぐものもありき、自然科学専門は人間を硬直ならしむ」と記し、五月二十四日には、「『俺もとふ〳〵自然科学者のカタワレとなったのか』と学校から帰りながらつく〴〵考へた。今日は昼やすみ農園の森の中でOとT（―原文のまま。小川、豊福であろう）と3人で神について話した」と書いている。これより先、予科最後のころには、学生の希望を高圧的に踏みにじる「新帰朝」の教師や、「学者は非常識で困る」といいながら「しかし又非常識でないと学問は出来ぬ」といって彼をかばう予科主事に、「我々は学者である以上に人間であらねばならぬ愛のない

学者に何の価値があらふ……多くの生徒を導く人々が愛とかやはらぎを失ひかけるのはおそろしいことではあるまいか」（二月三日、日記）という憤りをぶちまけていたのであった。

やがていわゆる学用患者に接し、解剖を見学するにいたって、医学への懐疑と模索の中に一つの方向が見えて来る。五月二十三日、「珍しい患者を見せると云ふ……出たものは何、思はずゾットした、頭と云はず足と云はず一面角だらけだ、……さむけがする……日本語で皮角と云ひ……皮ふが角になる　かへりながらその男を思ふた、家もなく親もなくさびしく日本をめぐり歩いて畸型体を見せて歩く一鮮人を思ふ時熱い祈を君がためにそゝがぬわけにはゆかぬ」。五月二十五日、結核で死んだ八カ月の妊婦の解剖。「この世の中を見て死んだ人とこの世の中を見ずに死んだ人（＝胎児）と2人の屍が血まみれになって解剖台に転んで居た時我々の心はどんなに動かされたらふ」。同日の午後も結核で死んだ女性の解剖。「骨と皮と云ふがこんな適切なものはなからふ、……肺臓はめちゃくちゃだった、……この間から思ひまどうた医者なるものの使命が自分の心の中にかたくむすばれた」。林は、「珍しい患者」についての講義や解剖の見学の中で、病理の実例に接しただけでなく、生と死という問題や、病める者を圧する貧困や差別という社会の問題を感じとったようである。

あたかもこの前後の日記には、入手して見はじめた「ケーティ」――Käthe Kollwitz であろう――の版画集への感動のことばが度々現われる。彼女もすぐれた天分を貧しい者、抑圧された者のために惜しみなく注ぎ、貧苦・戦争・死などを直視した傑作を残した。六月十七日、ただ一人病んでじめじめした牛舎の一角に寝ている人を見舞い、その足で教室に出て解剖を見学した日の記入は、「医者たるものの責任をます〳〵感じた。我進むべき道は一つだ」ということばで結ばれている。学部二年に進んだ翌一九二三年（大正一二）の春、五月十四日の記入は、自分の「使命」についての省察に終始している。「自分は一つの目的を持ってこの医学部に入ったはづだ、尊い目的――人はロマンチックと云ふかもしれぬ、ひょっとしたらセンチメンタルだと云ふかもしれぬが――医者としての尊い仕事をするために入ったのだ、動揺してはいかん、学問に目がくらんではいかん、うまさふと面白さふに見えても役にたたぬ心にもない学問に目をくれてはいかん、俺は俺で使命のあるのを忘れたか、博士〳〵と人が云ふ、これが大きな問題だ、博士をとる心持からもはやいやだ」その後間もない六月十九日、小野村林蔵牧師を訪れて「将来の実費病院の話などした」というのは、「一つの目的」がどの方面にあるのか、示唆しているといえよう。八月には妹がチフスの疑いで暫く円山病院に隔離されると

いう出来事が起り、林はまた新たに、患者の肉親という立場から、医者の使命について考えるのであった。「円山病院にゆくといつも自分の将来なすべき多くの仕事を見出す、まあ見たまへ、あの院長の若い事、そしていいかげんに時がたつとあそこをすててしまふのではないか、もしあの人がほんとに病人のためを思ふてやっているのなら別だが、つきそい人に対する一言の親接（ママ）な語、病人へのやさしい手、すべてが必要だ……円山病院の木立を出て思ふのはいつもこれだ、金もふけになる誰でもやれる事はもふ誰でもやる誰にまかしておいてもよい、我なすべき事〳〵武者ぶるひがする」。

こうした「使命」「目的」「責任」がにわかに具体化し、それに生涯を賭ける決断がなされたのは、この頃から翌年初めにかけてであった。後年の回想によれば、「大学はまだ出来た許りで学生が皆教室へ手伝ひに行って居りましたが私は……今先生（―病理学第一講座今裕教授）の処へお邪魔に参りました。そこに……藤井保先生が居られ、……村山の癩病院の話、又そこには三十年も癩の為に働いて居る光田（―健輔）と云ふ先生が居られる事など話してくれたのです。丁度私は二年許基礎をやり又病理の教室にも居て煩悶していた処でした。大学に入る時、自分は基礎の学者になりたいと思って居ましたが、段々その様子を見ると皆随分実際とは縁遠い仕事をして居る。否すべては何等か実際的の仕事の土台になるのだとは思ひ乍らも、自分の様な頭の悪い者には基礎で人類に貢献すると云ふ事は考へられない。さうだ、どんなつまらぬ医者でもよいから臨床家にならう。かく考へてまた時にこの藤井さんがシュトックを切り出しながら語る村山の話が私の心臓をゆり動かさずにおかなかった……さうだ癩病院に行かう。」（「後を顧ずたゞ前を目ざして」『西川外科十周年記念誌』）。「私は棚に並んでいるいくつかの癩の標本に異様な感動を受けた。次々と発する癩への質問は藤井氏を痛く喜ばしめ……た。兎も角今先生の教室の棚に並んで居た癩標本によって、私の一生の方針が決められた」（「今先生のお慶びに」『フラテ』三五号、一九三八年七月）。こうして、医者としての自己の使命についての彼の模索に終止符がうたれた。医学部二年の終わり、一九二四年（大正一三）二月十五日の日記には、「自分の目的、この一生かかってやらふと云ふ仕事、に幸あれ祝福あれ　我心は決った、東村山、東村山は我骨を埋る地　自分の目的はかへまい、色々の障礙はあってもそれによってやめる様な事はすまい、この人生をして美しきものたらしめよ、肉のために非ず霊のために、己のためにあらず、人のために、神のために」と記され、前後して、彼は、秘めた決意を今裕教授にうちあけた。「二年の終りの雪の深い日に、北十条の今先生のお宅で誰にも今迄話さなかった、又行く

時迄絶対に人に話してもらひたくないこの秘密を御話した。『そうか、まあ考へた通りやって見るか』と愛しさうにじっと私の顔にそゝがれた今先生の目は忘れられない」(「後を顧ずたゞ前を目ざして」)。重い病のために何日も床に臥した日にも彼は、「自分は東村山のために生きていたいと思ふ」(一九二四年四月二十日、日記)と記すのである。

このように、林文雄が救癩のために生涯を献げることを決心するにいたった背景には、キリスト教の信仰があったことはいうまでもなく、かつ、それを、世俗における業—医学と医療—の中でそれを証しするという、強烈な使命意識に裏づけられていた。彼は医学部一年のころから、夜も休日も研究室に出て研究に没頭するのだが、たとえば、正月の二日の朝早くから顕微鏡にむかった、一九二四年(大正一三)の日記には、このような祈りが記されている。「Vor dem Studium fleh ich dass, この教室をして信仰の道場となし給へ、吾学問をして即信仰の生活となし給へ、顕微鏡を通して神を見る事を得しめ給へ、……学問を学問だけにしておくものかとちかった」。

こうしたキリスト教信仰とともに、大正デモクラシーの時代の青年らしい、理想主義とヒューマニズムも、彼の救癩への献身の一つの動機だったようである。有島武郎の狩太農場解放の新聞報道に「かくあるべき筈なれどもえらし」(一九二二年三月四日、日記)と記し、シベリア飢民救済のためにお金を送り(同年七月三十一日)、「皆一諸によろこべぬよろこび……皆が一諸によろこび悲しめる様な世の中にしなくては、この欠陥をなおすべし、よし今の我々の生活が少し下落しても皆一様にさふだと思ふ時は心から満足だ」(一九二三年三月三十日、日記)と記し、世界語エスペラントを独習する。「Kara samideano(—親愛なる同志!—筆者注)と全人類のさけぶ時が望まれる、語でこの地上に平和が来るとは思へぬ、……しかしこの地上の人々が皆同じエスペラントを用ひたらどんなに美しい世になるだろふ、平和をたすけるだらふ、そふ思ふだけでも希望者(エスペランチスト)の価はある」(同年七月十八日、日記)。同時に、皇太子行啓に備える札幌都心の交通規制に憤懣をぶちまけ(一九二二年七月五、八、十一日、日記)、教会で行われた入営送別会にのぞんで、「基督者として『殺すなかれ』の聖句を頭にしながら兵営に入ることはいかに心の争をひき起す事だらふ、それが悲しい、おくる人々は皆入営を肯定している、だがどんなものか」(同年十一月十七日、日記)と批判し、「陸軍記念日だ、大通で戦争のまねをするさふな」(一九二三年三月十日、日記)と書きつけ、「議会のバトー、ブルショア(ママ)の無恥」(同年四月二十三日、日記)に憤り、「渋沢さんだの大くまさん」に依存するキリスト教会を批判するのである(同年六月十日、日記)。

三

一九二六年（大正一五）、第一期生として北海道帝国大学医学部を卒業した林文雄は、西川外科で一年学んだ後、翌年六月、東京府下東村山村の聯合府県立全生病院に医員として赴任した。札幌日本基督教会の長老の一人の家で開かれた壮行の会に集まった、同じ教会の親友の中には、医学部同期の小川信一らとともに、農学部に学んだ近藤治義もいた。近藤も小野村牧師の強い感化を受け、林文雄と前後して、それまで描いてきた生涯の路を大きく変えるにいたった青年の一人であった。近藤治義（一九〇一―一九八一年）は、美深、佐呂間を開拓したキリスト者農場経営者近藤直作の子として生まれ、少年時代から札幌日本基督教会に通った。中学時代には「高倉徳太郎（―牧師）が……短期間だったが本気で相手になってくれ……『モノを本質的に考えること』を高倉から学び、『それをどう発展させるか』を洗礼を授けてもらった小野村林蔵牧師から学んだ」（「庶民の『原石』みがいて36年――小樽シオン教会と近藤治義牧師」『月刊キリスト』一九六九年八月）という。同じ教会に連なり、同じ札幌一中に学んだ林文雄とは、早くから親しかった。

一九一八年（大正七）予科入学。農学部農業経済学科に進み、予科の終わりごろから農学部卒業まで、教師また事務員として遠友夜学校を助けた。林文雄より一年早く、一九二五年（大正一四）、卒業論文「小作料について」を提出して卒業、この頃終生を伝道と牧会に献げる決心をして、かつての師高倉徳太郎が教える東京神学社に進んだ。近藤は世間の常識をこえる決断をうちあけた時、二人の人がそれを励ましてくれたことを記している。一人は農業経済学科の主任教授であった。「（神学社に進む決心を―）高岡熊雄先生……に打ち明けた、意外にも先生は膝を乗り出さんばかりにして、『君そりゃイイ考えだ、北海道の開拓や財界の仕事をやる人間は沢山出てくる。日本の精神界の開拓はこれからの仕事だ。キミがそういう方面に進むというのであれば困難であろうがやり甲斐があろう。キミの前途を祝福するヨ』と励ましてくれた」（「教会創立記念日にあたって」『ことば』二九六号、一九六二年二月。近藤治義『近藤治義設教集』一九七八年に再録。なお、近藤「旧いサッポロの精神史と思い出」『札幌同窓会誌』第三号、一九六八年一一月、参照）。他の一人、「よしやきみ斃れ死すとも美しき真実こめて生き終うしませ」という歌を詠んで勇気づけてくれたのは、遠友夜学校に学ぶ女生徒だったという（近藤治義「夜学校の思い出」札幌遠友夜学校編・刊『札幌遠友夜学校』一九六四年）。

帝国大学その他高等教育機関に学んだ者が、召命を自覚して伝道者となり、あるいは東京神学社に進むというのは、彼の師、法学士高倉徳太郎のころから一九二〇年代にかけてのすぐ

れた知識人にしばしば見られたことがらであった。事実東京神学社における彼の少数の同期生のうち、小塩力は東京帝国大学の農学士、松尾喜代司は東京帝国大学を出て検事に任官していたし、一級上の浅野順一は、東京高等商業を卒業して三年間三井物産に勤めていた。近藤治義も、彼らとともに、あたかも生涯の白熱の時期にあった高倉徳太郎のもとで学ぶこと二年、招かれて母教会に副牧師として帰った彼が、入れかわりのように全生病院に赴く林文雄を送ることになったのである。

一方林文雄は、一九二七年（昭和二）、全生病院医員となり、三一年（昭和六）には、瀬戸内海の小島、長島（岡山県）に国立療養所長島愛生園を新設するに際して、園長となった全生病院院長光田健輔の片腕として、医務課長となって創業の労をともにし、三三年から一年間、国際聯盟の癩視察員として世界各地の救癩事業を調査、一九三五年（昭和一〇）には、鹿児島県下の鹿屋に国立療養所星塚敬愛園を新設するに当たって、初代園長となった。この間、全生病院勤務の終わりごろ、一九三一年（昭和六）には、思師今裕が、「大部仕事も出来たやうだから論文を出し給へ、手続か、それは全部うちでやってあげるよ、……札幌のお父さんの所へゆけば印もあるだろう」（林「今先生の御慶びに」『フラテ』三五号、一九三八年七月）と熱心にすすめ、万事とりはからって、医学博士の学士をえていた。また、医学部学友会の雑誌『フラテ』のもとめに応じて寄稿し（例えば「癩の顔」三一号、一九三六年一月）、また長島愛生園時代には、北大医学部の学生が、林の国際聯盟視察員としての報告『世界癩視察旅行記』を読んで愛生園を訪ねた（たゞ、林は沖縄に出張中であった。その報告は、鈴木弘「長島・大島癩療養所めぐり」『フラテ』二九号、一九三五年七月。ちなみに鈴木は、赤色救援会北大班に加わって、一九三二年、停学処分を受けている。）などのことはあったが、林の勤務地が札幌から遠くなるにつれて、北大医学部とのきずなも次第に細くなっていった。

一九三七年（昭和一二）春、林と母校とは、太いきずなで結びなおされるにいたった。その間の事情は、彼が敬愛園の機関誌『星光』に載せた始末記によくまとめられているので、全文を引く。

北大の救癩会

北海道大学医学部に救癩会が出来た。初めは小さなものと思うて居たが最近の学友会誌によると今総長が会長で九人の教授が顧問となり、十四人の卒業生が評議員となり十六人の学生の委員からなる大規模のものである。此大学医学部は毎年三月に三年生の学生が見学旅行に出るのであるが昨年は三人の学生が遠く大隅の本園を訪れて我々を驚かせた。彼等は既に東村山で理想的療養所全生病院を見学して来て居るのであるが尚我らを訪れ帰路には四国の大島療

養所迄足をのばした熱心さであつた。

帰学して直に報告会を開き療養所見学の感激を語つた。そして遂には三百人の定員に四百人以上を収容し困窮して居る敬愛園に病舎を寄贈すべしと云う与論を作つたのである。

北の学都にあって南隅の一療院の為に斯程まで熱心であるのは一見真に奇蹟的であるが私は先日その三人の訪問者から手紙を戴き之あるかなと思つたのである。即ち

「私が先生にお会いして以来は何か後輩として為すべき責任を担つていた様で心苦しかつたがフラテ寮をお贈り出来てその責任が幾分なりとも軽くなつた事を感じます。」

彼等はせめて一人は療養所へと考えて居られたと云う。それ程の覚悟であればこそ一学部を動かしてフラテ寮の竣工を見たのである。

本年の修学旅行では七名の学生が本園を訪れた。地は辺陲の地であり余は浅学菲才何の教え得る事もなかつたが、純朴なる病友に触れ、大拡張工事の斧鉞の音の中に立つフラテ寮を廻りつゝ大きな感動を受けたものと見える。病友を思う熱情と救癩の斗志とは札幌へ帰つても益々燃え上り共に語りあつた。

「今晩中にこの気持を必ず具体化する」その一人はかく云うて翌日から猛運動を起し十四期生（四年生学生）一同が発起人となつて活動を始める事になつたと云う。

「先づ強調せねばならぬ事は、真に理解ある先輩諸兄のこぞつての後援の下に例え目に見える働は如何に少なかろうと何時までも変らぬ気持を以て長くこの会を続けて行かねばならない事です」

「兎もすれば面倒臭いとか、頭を下げて会員になつて呉れなどと云うのはいやだ」と云う気持が起つて来ると「門前に来て哀願する病者をどうして拒み得ようか。医師も事務員も患者自身も皆で費用を倹約して、一人でも多くの病者を入れてやらねばならぬ」と日頃つとめて居る療養所の方々の事を思い出しては懶る心を鞭打つた。

この純真なる心の前には頭を下げざるを得ないのである。

「おい俺はこれから〇〇教室に行つてくるぞ」時間のあく度にガヤ〳〵した控室に澄んで響くこの声は建設委員諸兄のそれであつた。

かくてこゝに堂々たる陣容を以て救癩会は生れた。会としては醵金して療養所を援ける事でありこれには既にフラテ寮を建て、又最近百数十円の献金がありその半は新設沖縄愛楽園に贈られた。会員には本誌星光が配布され既に

三百部の購読がある。又会としても会報を作つて同志を固めているのである。

私は長い救癩史に大学の一学部を挙げてのかゝる美しい救癩運動あるを知らぬのである。

そして最も重大なる会の目的は外には癩が我国から姿を消すまで、否全世界から消滅しつくすまで心からの後援を続けたい。そして内には療養所にある尊い救癩の人道的精神を我らの内に永く〳〵生かしてゆかねばならぬとの宣言がなされて居るのである。

我等はかゝる純なる美しき雄叫びに胸打たれつゝ足らざる怠り勝ちなる自らを省み奮起せしめられるのである。かゝる雄叫びは癩者を立たしめるのみならず我等救癩事業従事者を奮起せしめる。遠く北の方北斗星の下の一学都に総長閣下を頭とし一学部挙つて我ら一団の為に祈りつゝあると思う時、我らは感涙に咽びつゝ大使命に邁進せざるを得ない。（『星光』第三巻第八号、一九三八年八月。ただし、戦後の再録から引いたので、表記は改められている）。

この大きな出来事の発端は、一九三七年（昭和一二）三月に行われた、医学部一三期生の衛生見学旅行であった。それまでも例年の見学旅行では、東村山の全生病院を訪れていたのだが、この年は、高橋新吾、秋田重秋、池田満穂の三人がさらに大島、長島、星塚の三療養所を歴訪して先輩林文雄に会うことが出来た。三人の感動がもとになって全学部さらに卒業生までもまきこみ、半年余りで大きな成果がみのったのである。『フラテ』三三号（一九三五年七月）には、三人の「療養所巡り」が載せられ、それをうけて、「昭和十二年六月三日　医学部学生一同」名の「癩患者救済林文雄博士後援趣意書」と、六月二日付の、すでに寄付金が予定額に達しようとしているという会計報告が掲げられている。前者は、おそらく、癩療養所を歴訪した三人の誰かが書いたのであろう。日本の救癩の現状と林文雄の献身そして彼らの感動と決意を、詳細にかつ生き生きと書き綴った感動的な文章である。『フラテ』三四号（一九三七年十二月）には、病舎の図面と竣工写真をそえた「『フラテの家』完成報告」が載せられている。北大医学部関係者の手で病舎一棟が寄贈されたのであり、「レプラ・アルツト」の母校が、彼を通して病舎を贈るというのは、初めてのそして後々まで異例のことだったという。

翌一九三八年（昭和一三）三月には、一四期生七人が、星塚を訪ねて林文雄に会い、「フラテ寮」を眼のあたりにした。その感動が、三人の三期生から始まって病舎の建設に実った運動をそこで終らせず、永続的な運動――「後援会」――を組織させることになった。先に引いた林の「北大の救癩会」にいう

「最近の学友会誌」は『フラテ』三五号（一九三八年七月）であり、そこには、小泉勝雄の報告「星塚の記」を受けて、星塚訪問から後援会組織を思い立つまでを生き生きと綴った「医学部第一四期会（第四学年）学生一同」名の「癩救済林文雄博士後援会設立趣意書」、同会の会則、役員名簿が掲げられ、活潑に動き始めた中心メンバーの経験と意見を記す。滋賀秀三の「会のことども」、「L生」の「会の誕生を祝して」があり、報告「会の現状」、そして『北海道帝国大学新聞』によって、後援会の発足を知った長崎次郎からの「感謝と共に御願ひ」の手紙が載せられている。会員は年一円を納めて、星塚敬愛園に送るとともに、園の機関誌『星光』の配付を受けるというのが、具体的な活動の中心だが、星塚に林を訪ね、彼が導く療養所の共同体に接した学生の一人が「今や国家非常の時、独り医界の問題のみを考えても制度の上に、或は又医者の人格方面に於て色々の批難を聴くのでありますが……此の会の計画が一般人の医者に対する認識を改めさせ、他方医者も之によって自己の姿を反省する機会を与へられゝば望外の喜びであります」（滋賀「会のことども」）と会の活動の精神的意味ともいうべきものを記しているのはいちじるしい。

後援会は、一九三八年（昭和一三）七月一日『会報』第一号を発刊、あるいはガリ版あるいは活版印刷、サイズもページ数も号によってまちまちな、いかにも手づくりというおもむきの会報は、一九四一年（昭和一六）六月一日付の第九号まで刊行を続けたようである（一〇号以下を見ることができなかったが、同年には戦時体制のもとで『フラテ』も休刊になっており、会報も終わったのではないかと思われる）。三年目学生の星塚敬愛園見学も、『会報』や『フラテ』によれば、少なくとも一九四一年（昭和一六）の一七期生までは続いており、一九四一年には、林文雄と同じ北一条教会の教会員でもあった有馬英二教授父子も訪れている。

医学部関係者以外からいち早く後援会に加わった長崎次郎は、一九三八年（昭和一三）、長島愛生園における林文雄の同志同僚小川正子の『小島の春』を刊行した。先に述べたように、少年時代から救癩の志をいだき、またキリスト教出版に私財を注ぎ、心身をすりへらして来た長崎次郎の出版事業は、志を高く持して安易な妥協をいさぎよしとせぬ出版方針のため、破綻に瀕していた。林文雄が大きななかだちとなって、救癩関係の書物をすでに何点か出版していたが、いずれもとうてい採算がとれるものではなかった。そのような窮境にあった長崎は、商業ベースの出版をすべて断られ、思いあまって長崎書店に持ちこまれたこの本を、友人から借金して刊行したのである。大方の予想を裏切ってこの本は、それまでの経験からはとうてい

想像も出来ぬような反響をまき起し、二二〇版二二万冊が出版され、映画化されるまでになった。キリスト教出版社長崎書店の基礎はこの書物によって確立したのである（中山良馬『小島の春』出版の頃」『福音と世界』一九六四年八月）。

林文雄は、一九四一年（昭和一六）六月、久しぶりに札幌を訪れた。星塚で世を去った父の遺体の解剖材料を母校に寄贈し、今裕総長を始め医学部の諸教授を訪ね、医学部学生に癩の疫学的研究における最近の成果について講演し、救癩後援会の学生たちに招かれて一夜懇談した。また小樽をたずね、同地のシオン教会の牧師となった近藤治義、協会病院長をつとめる医学部同期の親友でキリスト者である小川信一に会い、近藤の教会で講演した。母校を訪れ大学時代の恩師や旧友に再会することができたこの旅は、林にとって大きな喜びであった。しかし、敬愛園に帰任後、長年心血を注いで働き続けて来た彼の健康は急速に衰えていった。翌年、肺結核と診断され、一九四四年（昭和一九）二月、敬愛園長を辞し国立療養所大島青松園医官に転じて療養につとめたが、一九四七年（昭和二二）七月世を去った。太平洋戦争の激化という事態もあずかってだろう、林文雄の一九四一年の母校訪問を最後として、彼はまた母校から次第に忘れられていったようである。

ただ一七期生（一九四一年繰り上げ卒業）で、医学部一年の春、一年生としてただ一人上級生に加わって後援会の発足を助けた荒川巌は、その七年後癩療養所に赴くにいたった。荒川は、すでに、医学部に進んで間もないころ、一四期生が癩救済林文雄博士後援会の組織にのり出したのと前後して、入院患者をたずねて全生病院を訪れた。しかし、「この時受けたらい療養所の印象は、生意気かも知れないが、医者を志していた当時の私には、全くなじめないものであった。私の志す医療はここには不在のように感じた。それ以後、私にはらいに関心はあっても、らい療養所に医師として働こうという意志は起ってこなかった」（荒川「序にかえて」、松丘保養園七十周年記念誌刊行委員会編『秘境を開く』一九七九年所収）というのがその時の経験であった。他方、「求むべき師を得ず、心情を吐露し語り合う友なく、何回となく学生生活に失望しやめようと思った」（荒川「先生と私」、井藤道子・野谷憲三編『野菊　矢内原忠雄先生とらい療養所』一九六五年、所収）彼は、この頃矢内原忠雄の『マルクス主義と基督教』を読んで「先生の真実な信仰に目を覚まされ」（同前）、矢内原を師として終生の深い感化を受けるようになった。こうして復員後、師矢内原忠雄の癩療養所への慰問とキリスト教伝道の働きの姿を知ったことから、再び療養所とその中のキリスト者への愛がかきたてられて、一九四九年（昭和二四）星塚敬愛園の医官となり、一九五二年（昭和

二七)、「もう一度母校(北大)に帰って医学の力をつけたい」と思い、母校に最も近い青森の松丘保養所に配置換を願って許されたという。以後、一九七八年(昭和五三)には園長となって、同園のために労している。林文雄の志は、まわり道を経、形を変えて、次の世代の後輩によって継がれた、ということができよう。また、アメリカのキリスト教海外奉仕団体、後には日本キリスト教海外医療協力会に支えられて、ナイジェリアやバングラデシュの奥地での医療に献身する三〇期(一九五四年卒業)の宮崎亮(宮崎『密林の生と死と愛』一九七二年、参照)は、「大東亜戦争」や「大東亜共栄圏」の野望をくだかれた、混迷と虚脱の日本に重い病を養いながら、かえって、救癩を通じるアジアへの挺身と奉仕――「東亜救癩」――を夢見た林文雄の志(林「救癩の野心」一九四五年一二月、『林文雄句文集　天の墓標』一九七八年に再録)にはるかにこたえるものといえよう。

本稿作製に当たっては、林富美子(林文雄夫人)、秋山憲兄、近藤治義、荒川巌、山田滋(日本基督教会札幌北一条教会牧師)の諸氏に貴重な史料を御提供をいただいたほか、種々御教示をたまわった。近藤治義先生は、『百年史通説』の刊行をまたず召天された。これらの方々に心から感謝するとともに近藤先生に謹んで哀悼の意を表したい。

(北海道大学法学部教授)